

都道府県・ 指定都市番号	22	都道府県・ 指定都市名	静岡県	研究課題番号・校種名	3 (4) ～中学校～
				領域名	E S D
研究課題	学校全体で取り組む課題 (4) E S Dを学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童・生徒数)	いわた しりつとよだ ちゅうがっこう (381人)				
所在地 (電話番号)	〒438-0804 静岡県磐田市加茂 243 番地 (0538-32-4637)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.city.iwata.shizuoka.jp/school/toyoda-chu/				
研究のキーワード	「こころざし」，授業づくり，こころざしづくり，仲間づくり，教科の本質と教育活動の価値付け				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ E S Dカレンダーの作成を行ったことで，学習内容の系統性や教科間の横断的なつながりを再認識することができた。 ○ 教科の学習過程において「こころざしを実現する力」の育成を心掛けた結果，「かかわる力」が醸成している。 ○ 総合的な学習の時間の取組により，未来を担っていこうという意志の芽生えや，社会における自己の有用観が育ちつつある。 				

1 研究主題等

(1) 研究主題

未来につながる，世界に広がるこころざしをもった生徒の育成

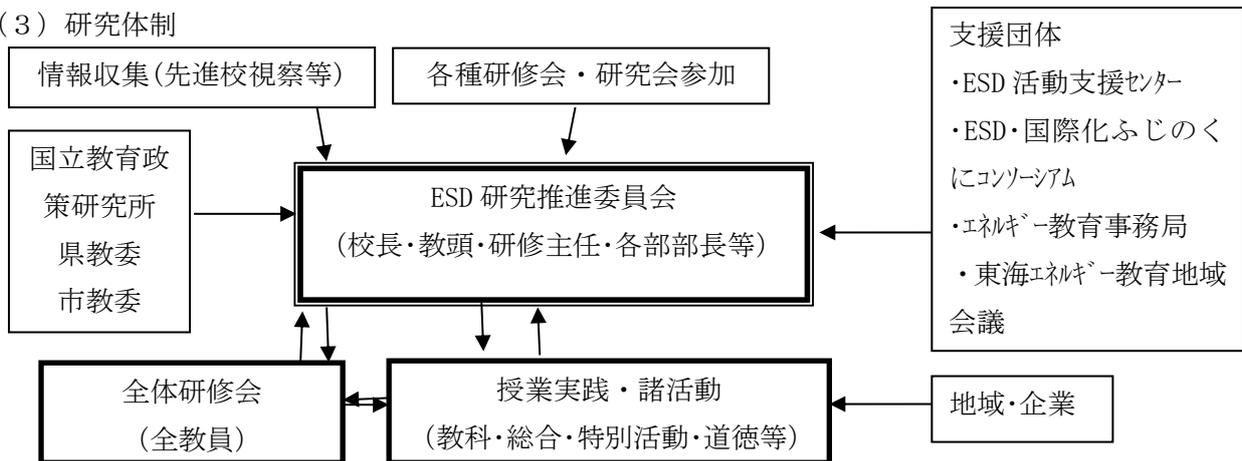
(2) 研究主題設定の理由

本校生徒の課題として，欠席率の改善や困難に立ち向かう気力の涵養等が挙げられる。数年間，学校教育目標「こころざしをもち，たくましく生き抜く生徒の育成」の下，キャリア教育を基盤とした教育活動を行ってきたが，大きな成果が得られていないという現状がある。

そこで，E S Dの視点を取り入れ，教科や総合的な学習の時間，特別活動等を再構築することで，自己を取り巻く全ての教育活動が未来や社会につながっていることを実感させたいと考えた。そうすることで，学習や活動の意義や価値を理解できれば，主体的な学びや多角的な見方・考え方を身に付けられると考えた。また，生徒一人一人のもつ「こころざし」が広い視野に立った高いものとなり，複雑で変化の激しい社会を生き抜くたくましさへと結びついていくことが期待できる。

そこで，研究主題を「未来につながる，世界に広がるこころざしをもった生徒の育成」とし，全教科・領域，全職員で研究に取り組むこととした。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

平成29年度	<p>4月 研究体制づくり, 平成28年度末の意識調査の分析 校内研修① (ESDとは, 本校の教育とESD, 研究の進め方等)</p> <p>5月 ESDカレンダー作成① 提案授業 (2年国語「モアイは語る—地球の未来」)</p> <p>6月 校内研修② (授業公開, 講義) 総合的な学習の時間 (2年「未来授業」, 1年「ようこそ先輩」)</p> <p>7月 意識調査① 総合的な学習の時間 (3年「地域貢献活動」)</p> <p>8月 校内研修③ (意識調査①の分析, 公開授業の検証, 講義) 教科部会 (教科キャッチフレーズ作成, 2学期の教材研究)</p> <p>9月 ESDカレンダー作成②</p> <p>10月 ながふじ学府全体会 (校内研修④: 公開授業, 分科会) 「ちゃんと見」授業公開 (一人一授業研究) 前半 総合的な学習の時間 (1年「先輩授業」, 2年「職場体験」, 3年「上級学校見学」)</p> <p>11月 エコタウン見学会 「ちゃんと見」授業公開 (一人一授業研究) 後半 環境教育実践力強化研修参加 (ESDカレンダー作りを通したカリキュラム・マネジメント等) 校内研修⑤ (プチ模擬授業, 教科ガイダンス演示, 教科キャッチフレーズ検討) 意識調査②</p> <p>12月 意識調査②の分析</p> <p>1月 校内研修⑦ (ESDカレンダー暫定版の完成, 平成29年度の成果と課題の検証)</p> <p>2月 国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定事業研究協議会 (発表・協議)</p> <p>3月 意識調査③ 意識調査③の分析</p> <p>※ <u>上記の取組に加え, 従来の行事 (鉄人遠足, 体育大会, 合唱コンクール) における「こころざし」づくりや, 生徒会活動における「ピンクシャツデー」や「服のチカラプロジェクト」等を実施した。</u></p>
--------	---

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

① 授業づくり

- ・ 各教科を学ぶ意義をE S Dの視点から再評価し、ガイダンス機能を充実させることで、生徒に教科学習を通じた未来や社会とのつながりの意識を高めていく。
- ・ 教科の学習過程において、本校の定める「こころざしを実現する力」を育成する手立てを盛り込んだ授業を構想する。

② こころざしづくり

- ・ 総合的な学習の時間において、地域貢献活動や職場体験等を充実させ、社会とのつながりを学んだり自己を見つめたりすることを通し、夢や「こころざし」を育む。
- ・ 生徒会活動等の中で、地域貢献、社会貢献活動を推進し、自己有用感を醸成する。

③ 仲間づくり

- ・ 学級や学校への所属意識を高め、ともに同じ意識を持って行動することの素晴らしさを体験させる。その絆が学級や学校に留まらず、広く世界とつながることへの期待感や視野の広がりにつなげ、より深く広い仲間意識を醸成する。

(2) 具体的な研究活動

① 授業づくり

- ・ E S Dカレンダーの作成を通じて教師自らが各教科のつながりを「自然環境」「平和」「伝統文化」「人権」等の視点から再認識するワークショップを行った。
- ・ 各教科の本質、学ぶ意義は、まさにE S Dであり、未来や社会とつながっているという考えから、教科の本質を端的に表現したキャッチフレーズ作りを行い、教科ガイダンスや単元ガイダンスの充実を図った。
- ・ 本校で育てたい資質・能力を「かかわる力（人間関係形成・社会形成能力）」「みつめる力（自己理解・自己管理能力）」「やりぬく力（課題対応能力）」「かなえる力（キャリアプランニング能力）」とし、教科指導の中で育成を図った。

② こころざしづくり

- ・ 総合的な学習の時間「こころざしタイム」では、1年「こころざしとは何かを知る」、2年「自分のこころざしを見つける」、3年「こころざしを実現する」をテーマとし、地域の人材を活用することで、自分の生き方を考えたり、未来や社会とのつながりを考えたりすることができた。
- ・ 体験を通して気付いたことや学んだことを伝え合う活動の場を設定し、思いを共有したり内省したりすることを大切にされた。2年生は「立志の式」で自らの「こころざし」を表明し3年生は自分たちの「こころざし」を、「地域貢献活動」や「先輩授業」という形で、地域や後輩たちに発信・提言した。

③ 仲間づくり

- ・ 体育大会や合唱コンクールなど、校内行事を通し、学級や学校への所属意識を高め、ともに同じ意識を持って行動することのすばらしさを体験させることができた。
- ・ 生徒会として民間企業の社会貢献活動「服のチカラプロジェクト」（海外の難民に古着を届ける活動）に協力し、家庭・地域からの回収活動を展開した。小さな力でもそれが海外まで届くことの喜びを実感することができた。

(3) PDCAサイクルへの取組について

生徒質問紙調査の集計結果をもとに、学年部ごとの話し合いを実施し、出た意見を集約してその後の重点方策を検討・実践した。

【1学期（7月）意識調査】

3学年ともに「授業がよく分かる」、「授業に主体的に取り組んでいる」のポイントが低い傾向が見られた。また、「社会がどのようなになると良いかいろいろと考えている」のポイントも低いことが分かった。一方で、3年生においては、3月の調査に比べてポイントの上昇が見られる項目が7項目あった。

〈改善のための重点〉

① 教科キャッチフレーズ作り

教師自らが教科の本質を見つめ直し、それが生徒に伝わる表現を追究したキャッチフレーズを作成し、授業で伝えていく。

② ESDカレンダー作り

1学期に、ESDの視点から俯瞰した各教科の年間計画を、学習内容や育てたい資質・能力により横断的につなげる作業を進める。

→ ①②を通して、教科と未来や社会のつながり

を感じさせるESDの視点に立った授業構想を練り、実践を重ねる。

③ 各学年の総合的な学習の時間の地域貢献活動や職場体験の場を充実させ、自らの生き方と未来や社会とのつながりを実感させる。

【2学期（11月）意識調査】

1, 2年生において「地域のことに進んで参加している」は上昇したが、「自分なりのところざしをもっている」については大幅に下降してしまった。「ところざし」についての学習を進め、考えが深まった結果、厳しい評価になったと考えられると考察した。

3年生については概ね上昇傾向であり、成果を見て取ることができるが、2年生については9項目でポイントを下げている。

〈改善のための重点〉

① 3年生：卒業し、大人となっていく期待を教師が語り、伝える。

2年生：立志の式に向け、一人一人のところざしを作文にして、発表させる。

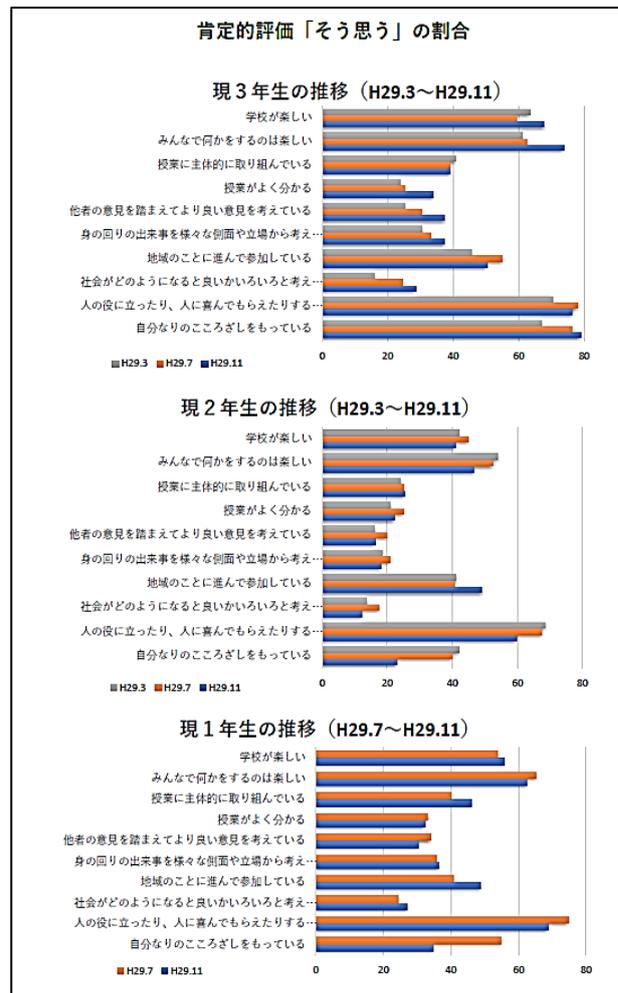
1年生：後輩に語れるよう「ところざしとは何か」を探究させる。

→ 生徒の考えの深まりや振る舞いの変容を認め、称揚する。

② 3年生と1, 2年生との交流の機会を設け、ところざしに関する学びをつなげる。

③ 未来や社会とのつながりを実感できるよう、各教科の学習活動ごとに価値付けを行う。

また、4月からの新年度に向け、教科キャッチフレーズの趣旨を生徒に伝える各教科のガイダンス資料の作成・検討を行う。



3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- ESDカレンダーの作成を行ったことで、学習内容の系統性や教科間の横断的なつながりを再認識することができた。また、それにより、当初の教科の年間指導計画を変更し、単元の再構築をはかるなど、指導の工夫をした教科が見られた。
- どの学年においても、意識調査の「みんなで何かをするのは楽しい」に肯定的評価をする生徒の割合が多い。こころざしづくり、仲間づくりにおける各種の活動によるものと考えられる。
- 3年生においては、意識調査の「自分なりのこころざしをもっている」に肯定的評価をする生徒が9割を上回る。また、「地域のことに進んで参加している」「社会がどのようになるとよいかいろいろと考えている」についても、緩やかに上昇している。総合的な学習の時間の取組により、未来を担っていこうという意志の芽生えや、社会における自己の有用観が育ちつつあると考えられる。
1, 2年生は、意識調査における肯定的評価の大きな伸びは見られないが、学習内容が増え、難度が増し、自信を失いがちな2学期において、大きな下落がなかったことは、成果といえるのではない。
- 意識調査における肯定的評価の上昇が見られる3年生との交流の機会をもったことで、自分たちの未来や社会に対する貢献について多くの1, 2年生がイメージすることができた。
- ESDカレンダーを、より実用性のあるものにしていくことが必要である。各教科を結びつけることはできたが、体系的にカリキュラムを再編するところまではできなかった。
- 教科キャッチフレーズの完成度が低く、検討の余地がある。最終的には生徒へ提示できるものとなることを目指したいが、まだ不十分である。教師が教科の本質を的確に捉えることと、生徒に学ぶ価値や意義を感じさせられる表現の工夫がほしい。そのためには、教師のESDの柔軟な理解が必要と言える。
- 1, 2年生は、意識調査の「自分なりのこころざしをもっている」の肯定的評価が半年の間に下落した。発達段階における原因と、「こころざし」についての考えが深まったことにより、肯定感が低まったと考えられる。それらを乗り越えるための支援の工夫が必要であろう。

4 今後の取組

- 「未来につながる、世界に広がるこころざしをもった生徒」のイメージを明確にし、総合的な学習の時間を軸としたESDカレンダーへの改訂作業を進めることを通して、教育課程を柔軟に見直し、「こころざし」というキーワードの下、体系化する。
- 授業づくりを通し、教師一人一人が教科をはじめとする教育活動の価値付けをする。また、教科キャッチフレーズを意識し、教科の授業開きや単元の導入時のガイダンスを充実させる。
- 地域人材の活用を促進し、生徒が様々ひと・もの・こととの関わりをもつことができるよう、総合的な学習の時間をはじめ各教科の単元の開発に努める。
- 異なる教科が一つの単元でコラボレーションしたり、外部機関・外部人材と共に授業を行ったりする「コラボ授業」を企画・実践する。